九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

無意識の凝縮としての三十一文字

荒木, 正見
九州大学哲学会会長・地域健康文化学研究所理事長

https://hdl.handle.net/2324/1397630

出版情報：藝術と自由. (289), pp.12-13, 2013-07-01. 芸術と自由社
バージョン：
権利関係：

エッセイ

無意識の凝縮としての三十一文字

荒木正見

前回は、無意識の表れとしての文学表現ということで、短歌と言う形式がほどよい大きさとして、心に潜在するひとつのテーマを引き出すことを述べた。その大きさとして非定形では、必ずしも三十一文字ではないが、その出自としてはやはり三十一文字を無視することはできない。本稿ではその古典的出自のひとつとして「古今和歌集」の歌を例に、三十一文字の中で動く心を考えてみたい。

「秋風に山のこの葉のうつろへば　人のこゝろもいかゞとぞ思ふ」素性法師

（「古今和歌集」巻第十四　恋歌四＝検索の便を考えて佐伯梅友校注・一九八一／二〇一二年・岩波文庫版より引用。一六九頁）

今、ひとつの実験を行えば解り易いかも知れない。

すなわち、まず「秋風に山のこの葉のうつろへば」のみを、じっくりイメージしてみるのである。「秋風」「山」「木の葉」「色の変化」など具体的でまぶたに浮かびやすい材料が揃っている。

次に、それらを組み合わせて自由にイメージを膨らませてみる。個々が自由にイメージを膨らませるのであるから、いわば、この句から引き出された鑑賞者の無意識に眠っていたテーマが浮かんでくる。

言うまでも無いが、ここまでは俳句の象徴性の世界である。

短歌、和歌はここからさらに七七の言葉による限定が加わる。この場合は、「人のこゝろもいかゞとぞ思ふ」と、移り気な恋愛へと、「思ふ」という心理的な限定が加わる。鑑賞者は、これまでさまざまに象徴性に沿って広げていた心を、作者の限定によって修正されることになる。

作歌に慣れた方ならこの方法が最も典型的な短歌表現のパターンであることに思い当たるであろう。そこには、具象から抽象へ、現実的風景から心象へという、分かりやすい心の流れが示唆されている。

このようにみれば、俳句に比べて短歌のより凝縮的、説明的な性格が理解できる。かく説明的とも言える為、俳句のファンが時としてこの説明性がまだるっこいと批判することも理解できる。かといって、小説などのようなより説明性の高いもの、さらには論文・評論などに比べれば、三十一文字はまだまだ象徴性の幅が大きいと言える。

さて、素性法師のこの歌は、目の当たりの風景から、無意識的であった心象へと凝縮させた典型的な作品であるし、この切り返しは特に初心者は学ぶべき価値があるものと思われるが、その逆の仕方でリアリティを追求した歌もある。比較のために、同じ作者の歌を引用する。

「はかなくて夢にも人を見つる夜は　朝（あした）のとこぞおきうかりける」素性法師

（「古今和歌集」巻第十二　恋歌二＝前掲書

・一四二頁）

「はかなくて夢にも人を見つる夜は」は、具体的な事実と思いとが統合した微妙な内容である。「夢」がそれを強化しているしたたかなキーワードである。

先のように、鑑賞者がここで一休みしてイメージを膨らませるとなると、先の例よりは不安定な場に立っていることに気づく。「はかなくて」で、感情的な限定が加わっているようにも思えるが、具体的風景に比べればずっと不安定である。しかも「夢」とくる。夢に現れた「人」は文学的、常識的には「恋しい人」であろうが、極端に言えば、「仏」だってありうる場面である。宗教心の強い鑑賞者のイメージに「仏」という解釈が成り立たないとは言えない。

しかし、「朝（あした）のとこぞおきうかりける」とくれば、「人」はまず常識どおり「恋しい人」であろう。もしそうでないのなら、この場合はそうでないための条件語を挟まなければならない。

このように、先の歌とは異なり、この歌は後に現実的事実を設定している。その具体性によって、「人」が、常識どおりの「恋しい人」であったことへと凝縮されるのである。

このようにふたつの歌の技法を比較してみると、学ぶべき幾つかの事柄が指摘できる。

まず、三十一文字とは、一テーマの凝集性を表現するのにふさわしい字数だということである。五七五と、俳句とも言うべき深く広い象徴性で心を提起して、七七と条件を狭めるところで、ひとつのテーマがくっきりと浮かび上がるのである。このことは、ここに二つ以上のテーマを持ち込もうとすると凝集性が薄れる恐れがあることをも意味している。

次に、始めの五七五と、後の七七との流れは、述べられてきたような、連続的な凝集性をもって徐々に焦点を絞っていくものだと言える。その絞り方は、例示した二つの歌でも異なったように、それぞれの歌独自の仕方がある。その独自性を追求することも興味深いことである。そして、やはりどのような方法であろうと、徐々に焦点を絞る方向性が基本であろう。

もちろん芸術作品なのだから、この方法に限らないことも付記しておかねばならない。原則的には徐々に焦点を絞るという方法が分かりやすく作りやすいが、独自の効果を狙ってあえてそうではない方法もあってもよい。このことは、筆者自身も試みていることでもあり、別の機会に述べさせていただく。

さて、以上のような視点からだけでも、数多い歌を見つめていくと、方法であれ、無意識から意識への表れとその凝集性であれ、学ぶべき多くが見えてくるであろう。

さて、いま翻ってわれわれ、非定形歌の世界も、歌と呼ぶ以上この三十一文字の意味を無視する訳にはいかない。かといって、作為が強すぎるのも芸術とは言えない。

日ごろ非定形・定型を問わず多くの歌に親しんで、そのつど少し本稿のようなことを考えて鑑賞し、自らの作歌の際には心の赴くままに表現し、推敲ではもう一度本稿のことを思い出して、自らの意図のようにテーマの凝集性は発揮できているのかと考えて整理してみる。その際、一瞬鑑賞者を自由に遊ばせる空間があれば理想的だが、三十字から長くても四十字という字数の中にそれを入れるのは至難の業である。この先は個性が登場する場面であろう。次の機会には、そのような個性的なテーマ提起の方法について、例示しつつ考えてみたい。